

学校と地域のあり方等について

- 学習指導要領→目指すのは「**社会に開かれた教育課程**」の実現 ※資料 P2

- 「令和の日本型学校教育」の実現のために地域・家庭との連携は必要
※資料 P6

- 「十日町市学校教育の重点」 ※資料 P10
 - めあて「ふるさと十日町市を愛し、自立して社会で生きる子ども」の育成
 - 特色ある教育活動の推進「**ふるさと学習**」 ※資料 P13～19
 - ・十日町市の歴史、文化、自然、産業等、について学ぶ
 - ・ふるさとの人・もの・ことに触れ、体験し、調べ、発信し、教材として有効活用
 - ・ふるさとへの愛着を形成→自信と誇りをもって活躍できる子供を育む

- コミュニティスクールの推進** ※資料 P11～12
 - ・学校運営協議会
 - ・地域学校協働本部の組織化

十日町市学校教育のめあて

「ふるさと十日町市を愛し、自立して社会で生きる子ども」の育成

小中一貫教育の推進

自己有用感を育む

学習指導

特別支援教育

生徒指導

保幼小接続

小学校

中学校

高校等との連携

特別支援学校

【共通課題】

学力の向上 …… 学力を高める授業改善、自ら学ぶ学習習慣の確立
 不登校・いじめの減少 …… 不登校・いじめを生まない風土づくりと指導体制の確立
 特別支援教育の充実 …… 一人一人の教育的ニーズに応じた指導、支援の質的向上

家庭・地域との連携

コミュニティ・スクールの推進

特色ある教育活動の推進

英語教育

- 小学校外国語の教科、外国語活動の円滑な実施
- 外国のくらしや文化への理解
- 英語によるコミュニケーション能力の伸長

ふるさと学習

- 十日町市の歴史、文化、自然、産業等についての学び
- ふるさと教材の有効活用
- ふるさとを愛する心情の育成

重点事項

情報教育

GIGAスクール構想の実現により、教育の情報化を図り教育活動にICTを効果的に活用するとともに、情報活用能力及び情報モラルの向上を図ります。

人権教育、同和教育

人権を尊重し、互いを認め合う態度と行動力を育てるために、同和教育を中核とした人権教育を推進します。

体育・健康教育

体力の向上、健康の保持増進のために、運動習慣の確立や規則正しい生活習慣への意識づけを図ります。また、感染症等についての正しい知識を身に付け、感染を防止し安心して生活できる実践力を育成します。

道徳教育

特別の教科「道徳」を要しつつ学校の教育活動全体を通して、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養います。各学校は、家庭や地域、中学校区と連携して推進します。

キャリア教育

社会的、職業的自立に向けて必要な意欲や態度、知識や技能の育成を視野に入れ、地域社会と関わり、夢や希望を志につなげる学習活動を展開します。

食育

食への関心を高めながら、正しい知識と望ましい食習慣を身に付けるとともに、地産地消を大切にして生涯にわたり健全な食生活を実践しようとする態度を育成します。

努力事項 SDGs（持続可能な開発目標）を意識して取り組みます。

図書館教育

情報館等と連携しながら学校図書館の計画的な活用を図り、多様な読書活動を促し読書習慣の形成に努めます。

福祉・ボランティア教育

様々な交流を通して、思いやりの心や感謝の心、奉仕の精神を学ぶとともに、社会の形成者として共に支え合い、よりよい社会をつくらうとする態度の育成に努めます。

環境教育

様々な体験的な活動を通して、自然環境の大切さについて考え、身近な環境の保全やよりよい環境の創造に向けた実践力や資質の向上に努めます。

防災教育

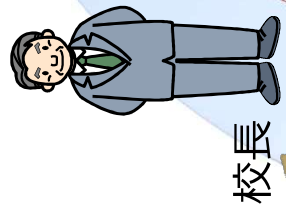
家庭、地域、行政と連携し、様々な災害の危険から自ら命を守り抜こうとする防災意識と主体的な行動力の育成に努めます。

「社会に開かれた教育課程」の実現のためのコミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進

P

- 学校運営の基本方針の承認**
- ・教育課程・組織編成
 - ・学校予算・施設管理

- ・地域学校協働活動に関する協議
- ☑何を**目的・目標**にして行うのか？
 - ☑どのような**手段**を行うのか？（**効果的な手段**は？）
 - ☑学校の「**教育課程**」とどう関連付けるのか？



- 学校運営協議会**
- 【委員】
- ・保護者 (PTA) 代表
 - ・地域学校協働活動推進員、地域住民代表
 - ・企業・組織 (青年会議所・社会福祉協議会)
 - ・接続校の管理職 等

地域学校協働本部



地域学校協働活動推進員

【地域と学校をつなぐコーディネーターの役割】

「社会に開かれた教育課程」の実現のため



- ・地域学校協働活動 (放課後子供教室・地域未来塾等) の評価
- ☑ **コーディネート機能**
 - ☑ **多様な活動**
 - ☑ **継続的な活動**

・学校評価 (自己評価・学校関係者評価)

- ＜次年度に向けて＞
- ・ **目的・目標**の (再) 設定・微修正
 - ・ 具体的な**手段・方法**の工夫・変更
 - ・ 何を**スクラップ・統合**するか？
 - ・ **新たな課題**への対応をどうするか？
 - ・ どのよう**に「業務改善」**を行うか？ 等

A

教育委員会



・授業評価

C

D

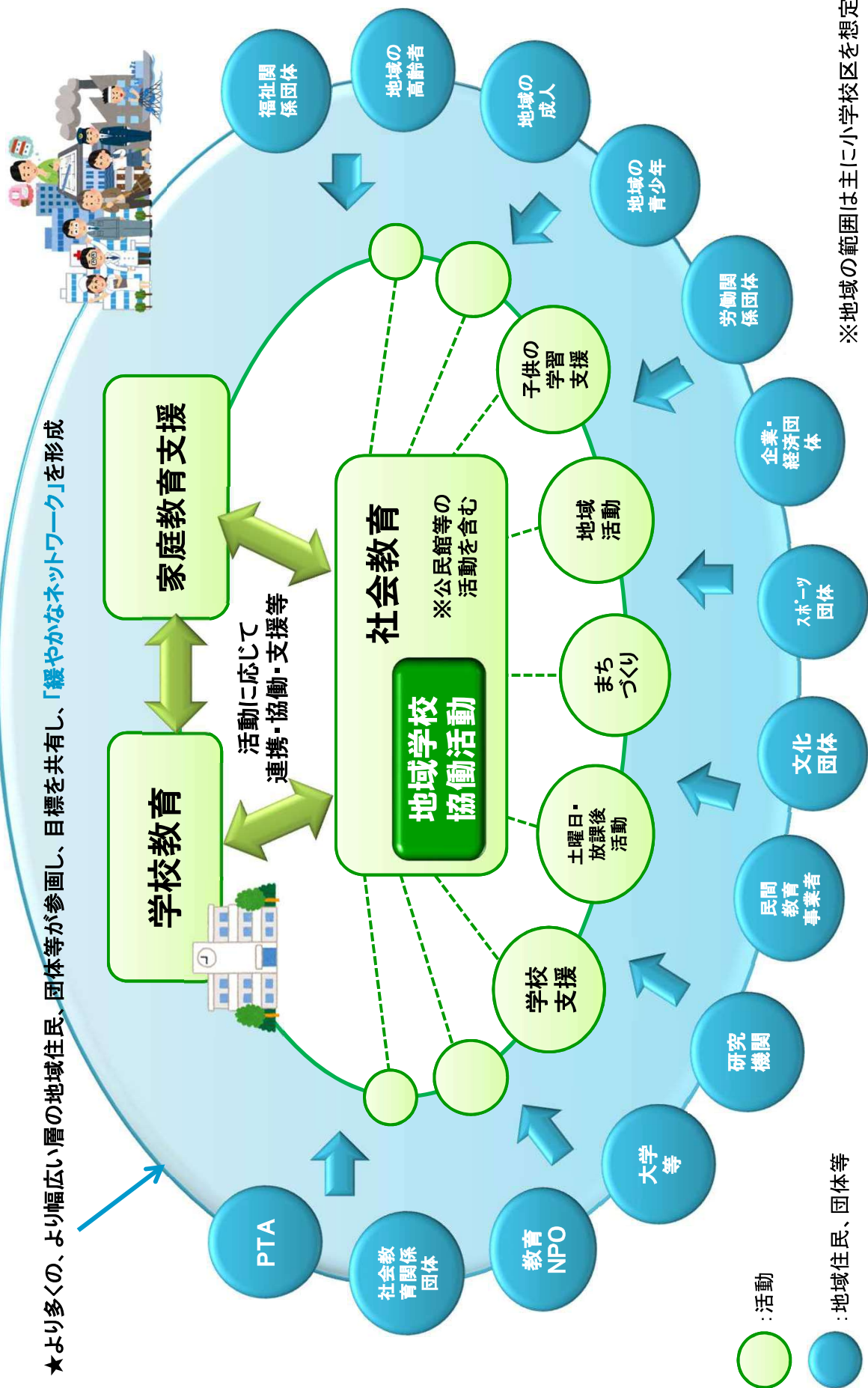
地域学校協働活動

- ・授業補助
- ・ふるさと学習
- ・課題解決学習
- ・キャリア教育支援
- ・読み聞かせ
- ・登下校の見守り
- ・放課後子供教室
- ・学校行事
- ・地域行事 等

地域全体で未来を担う子供たちの成長を支える仕組み（活動概念図）

資料3-3

- ◎ 次代を担う子供に対して、どのような資質を育むのかという目標を共有し、地域社会と学校が協働。
- ◎ 従来の地縁団体だけでなく、新しいつながりによる地域の教育力の再生・充実は、地域課題解決等に向けた連携・協働につながる、持続可能な地域社会の源となる。



小1 十日町小学校

子どもの豊かな学びのために ～学校支援ボランティアとの連携～

1 はじめに

コミュニティ・スクールの完全実施から5年。本校では、コミュニティ・スクールが始まる前から保護者・地域との連携のもと、「きものサークルわかむらさき」「読み聞かせサークルころころりん」「安全パトロール」等、様々なボランティア活動が行われてきた。

これらの活動の継続にとどまらず、コロナ禍での新たな取組や学校の教育課題、職員のニーズに対応した学校運営協議会の取組のおかげで、子どもの豊かな学びが支えられている。

2 「三方よし」の活動

活動は、「子どもよし、教職員よし、地域（ボランティア）よし」の「三方よし」を基本的な構えとしている。以下、今年度実施した活動のいくつかを紹介する。

(1) 施設メンテナンス「生け花ボランティア」

地域在住の生け花師範の作品が、月に1回以上（年に12回以上）玄関前や校内の踊り場などに飾られる。文化祭や卒業式などの大きな行事の際には、校内を華やかに演出している。今年度150周年記念式典を開催した際も、多くの作品が展示された。



(2) 環境サポーター「クロスカントリースキーコース整備」



冬季の学習としてクロスカントリースキーの学習に取り組んでいる。クロスカントリースキーに取り組む際は、コースの整備が欠かせない。当校のコースはとても長く、整備には1時間以上かかることもあるため、ボランティアの方のご協力を得て、コース整備をしている。スノーモービルに熟達したボランティアの方のご協力のおかげで、多様なコースが整備され、子どもも楽しくクロスカントリースキーに取り組むことができている。

(3) ゲストティーチャー「クラブ活動講師」



クラブ活動では「工作クラブ」や「裁縫クラブ」、「屋内スポーツクラブ」などを実施しているが、七宝焼きやパラスポーツなど専門的な知識を必要とする活動や、ミシンによる裁縫など多くの支援者が必要となる活動が設定されている。そこで、今年度からクラブ活動に、外部講師としてゲストティーチャーを招いた。こうした活動を専門としている方のご指導のおかげで、より充実したクラブ活動を実施することができ、子どもからも満足の声が多く挙がった。

(4) 学習アシスタント「水泳授業の安全監視」



水泳授業の際、安全監視の支援者を募っている。水泳授業は、子どもの安全について、特に注意が必要である。子どもの指導と安全の確保は互いに保証されなければならない。そんな中で、ボランティアの方の安全監視のおかげで教師も水泳授業の指導に専念できた。

3 おわりに

学校支援ボランティアは、子どもの豊かな学びの実現につながった。「こんな支援があればこんな活動ができる」といった学校の思いやニーズを受け止めていただき、実現可能なものから次々と支援していただいた。また、「学校の花壇整備」など、学校環境の整備にもご尽力いただいた。今後も地域との交流を大切にしながら「ふるさと十日町を愛し、自立して社会で生きる子ども」を育てていきたい。

小2 中条小学校

地域との関わりの中で自分の考えを表現し、自ら学ぶ子供の育成

1 学校課題

中条地域には、豊富な地域教材と人材がある。コロナ禍にあっても、できる限り地域との関わりを大切に学習活動を各学年が実施し、目指す子供像にせまった。

2 今年度の取組

(1) 1年生：生活科「生き物大すき」

アサガオを育てたりヤギの世話をしたりする等の活動を通し、命あるものを大切にする心情を育ててきた。ヤギは当校児童の家で飼われており、そこに児童が訪れ、ヤギ小屋の掃除や餌やり等をして触れ合った。初めはヤギを怖がる児童も、関わりを重ねることでヤギへの愛着を深めていった。また、ヤギを飼っている方からも、世話の仕方やヤギを慈しむ思いを教えていただいた。

ヤギとの関わりを通して、児童は命の大切さへの気付きを深めることができた。

(2) 5年生：総合「おいしい米づくり」



地域の方の協力を得ながら総合的な学習で米づくりの学習に取り組んだ。田植え、稲刈り、脱穀まで体験した。初めて体験する児童も多く、体験を通して、米づくりの大変さを体感した。さらに、自分たちで育てたお米を炊いて食べたことにより、「そのおいしさを地域の人にも伝えたい」という思いを持った。

おいしさを伝えるためにはどのような方法があるかを検討し合った結果、十日町市のスーパーで販売することになった。おいしさをPRするポスターの作成、買ってくれた人が喜ぶパッケージの工夫等も行った。コロナウイルス拡大により一度は延期になったが、販売当日、多くの方から購入していただき、児童は米活動への達成感や充実感を味わうことができた。

(3) 6年生：総合 学校運営協議会参加



昨年度から、6年生が学校運営協議会に参加し、学校運営協議員との話し合いを行っている。今年度も、「地域・家庭と一緒に『大きな学校』をつくろう」をテーマに、課題は何か、地域・家庭・学校各々ができること何かについてグループごとに意見交流をし、協議内容を共有し合った。また、児童から地域への要望も話し合った。6年生は予め自分の意見を持って参加したことで、活発な意見交流ができた。

最後の感想発表では、児童から「普段言えないことを大人に聞いてもらえてよかった」「来年ももっといい中条小学校にするために、卒業までに自分たちができることをしていきたい」等、前向きな意見が活発に出された。また、委員の方からは、「様々なことに最高学年としてしっかり取り組み、ふるさとへの熱い思いも持っていることを知り、とても頼もしく感じた」という感想をいただいた。

3 成果と課題

コロナ禍において、可能な範囲で充実した地域と関わる活動が実現でき、児童の学びを深めることにつながった。地域にとっても、学校との関わりは、価値あるものと評価いただいた。来年度も引き続き、地域連携を大切にしていきたい。

6年生が学校運営協議会に参加したことは、学校・家庭・地域が一丸となって「大きな学校」つくろうとする気運を昨年度以上に高めた。来年度も続けていきたい。

様々な取組を通して、児童が自信を持って自己表現する力の育成が必要であることが課題として見えてきた。今後は、校内研修や居心地のよい学級づくりの取組と関連しながら、そこに重点を置いて教育活動を展開していきたい。

小4 飛渡第一小学校

「ふるさとを愛し、かかわり合って高め合う子ども」の育成

1 はじめに

全校児童11名の極小規模校である。「飛渡を愛しかかわりあって高め合う元気な子ども」を目指す子どもの姿とし、学区の豊かな自然と人とのかかわりを大切にしたい教育活動を進めている。

今年度は、サケの放流を始めて14年、飛渡川に放流したサケが戻るようになって10年の節目の年を迎えた。

飛渡川とサケについての取り組みや飛渡の人とのかかわりを大切にしたい取り組みを通して、いきいきと学ぶ児童の様子を以下に紹介する。

2 今年度の取組

(1) ふるさと環境学習の推進（サケの学習）

① 水質調査・水生生物調査

2年前には、「飛渡川を守ろう」のリーフレットを作成し、地域全戸に飛渡川の環境保全を呼び掛けた。当時と現在の飛渡川の水質を比べるため、2年ぶりに調査を行った。水の汚れ具合を調べたり水質調査から汚染の原因を考えたりした。

児童は、得られた結果から水質の変化の原因として考えられることを予想し、有識者に聞いたりデータを集めたりし、調べたことを文化祭で地域に発信した。確固たる原因の特定には至らなかったが、調査を継続しようとする意欲をもつことができた。



② 村上のサケに学ぶ（イヨボヤ会館見学）

村上市「イヨボヤ会館」の見学を通して、森と川はつながっていること、サケは生まれた場所の水のおいさを覚えていることなどを学んだ。

児童は、「ブナ林の伏流水を汲んできてサケを飼育していることには意味がある。」と再認識し、ブナ林を守ることは、飛渡川とサケを守ることに直結していることを実感した。

③ サケの遡上見学

11月には、飛渡川河口へ行き、実際にサケが遡上してきている様子を見た。サケが子孫を残すために、生まれ育った飛渡川に何千キロもの距離

を旅してきたこと、体がボロボロになっても命をかけて生まれた川に戻ってくることを目の当たりにし、命の大切さや飛渡川のサケを守っていききたいという思いを強くした。

(2) 地域の活性化を目指して

① 地域のお年寄りとのふれあい

児童は、「地域を元気にしたい。笑顔にしたい。」という思いをもっている。しかし、高齢化が進む当地域では、お年寄りに来校してもらうことが難しい場合もある。そこで、「地域の方に学校や児童を知ってもらうこと・児童との触れ合いを通してお年寄りに元気になってもらうこと」をねらいとして、公民館などで行われている健康体操やボッチャ教室に参加した。どの活動においても、児童もお年寄りも楽しく和やかにかかわる姿が見られ、有意義な時間となった。



② コミュニティスクール委員との連携

コミュニティスクールのさらなる活性化を目指し、今年度はふるさと環境学習について、コミュニティスクール委員に案内を配付した。田植えや稲刈りなどに多くの方から参加いただいた。また、次年度へ向けての方向性を決めるため、ワークショップを開催した。「人が集まる飛一小」をキーワードとして意見交換を行い、有意義な話し合いを行うことができた。

3 おわりに

今年度の取組により、「飛渡川にサケをもどそう」を合言葉に、これまで継続して取り組んできた先輩方の思いに触れ、飛渡川や飛渡地区に対する地域愛を一層強くすることができた。また、調べた結果やデータをもとに分析したり、プレゼンソフトを用いてまとめ発表したりする活動を通して、情報を発信する力が向上してきている。

地域を支える学校として、今後も自然や人との交流を大切に、飛渡の良さを実感しふるさとを愛する児童の育成に励んでいきたい。

小12 千手小学校

「ひと・もの・こと」との関わりから「居心地の良い学校・学級づくり」を目指す取組

1 学校課題

千手小学校の目指す学校像は、「一人一人が輝き、安心して学べる学校」である。その具現を目指し、また、学力差や不登校の解消といった学校課題の解決に向けて、「ひと・もの・こと」と関わることを通して、一人一人の自己有用感を高め、居心地の良い学校・学級づくりに取り組んでいる。

2 実際の取組

(1)人と関わることで「できた!」「楽しかった!」を実感した子どもたち ~特別支援教育~

生活単元学習「秋を楽しもう!」の取組である。A教諭は、人と関わることに弱さがある子どもたちの実態を見取り、目指す子どもの姿を「秋祭りを通して、人と関わることの楽しさを実感する子」と設定した。その具現のために、単元を通して「友達と協力して品物を売ろう!」をめあてとし、毎時間の導入や振り返りで、子どもたちとそのめあてを確認・共有し、関わりを意識させ続けた。

B児は自然と触れ合うことを好む子どもである。近くの公園での「秋を探そう」の活動では、トンボやコオロギ、イチヨウの葉などを探したり、友達が捕まえた昆虫と一緒に観察したりして楽しんでいた。一方、振り返りの場面では、友達との活動を思い出すことができない姿があった。友達と関わり、楽しむ自分を自覚させたいと考えたA教諭は、次の時間、一人一人のがんばったこと、友達と楽しそうに過ごしていた姿を語り掛けた。毎時間続けることで、B児は、「Cさんと一緒にリースを作るのを頑張りました。」「次も頑張りたい。」と自分と友達との関わりを自覚し、次の活動への意欲を表すことができるようになった。

単元のゴールである秋祭りでは、B児はC児と一緒に木の葉や実を材料にしたマスコットやしおりなどを売るお店を担当した。一緒に品物を作ったり、品物を渡す役とお金を受け取る役を分担したり、準備を楽しむ姿があった。そして当日。お客は、参加した全校の教師である。まず、A教諭は「昨日はBさんとCさんは、自分の仕事を最後までしっかりとしていたね。」と友達とがんばった姿を褒めた。その上で、「◎友達と協力して品物を売ろう!」とめあてを示した。B児は、背筋を伸ばして真剣な表情で聞いていた。いよいよ「秋祭り」のスタート。A児をはじめ、一人一人が「自分の活動を楽しむ姿が見られた。

振り返りの場面では、B児はまっすぐに手を挙げ発言した。「めあてをクリアすることができました。」「いっぱい売れてうれしかった。」「これまでの活動で、Cさんとも協力できました。」「次の活動もがんばりたいです。」「自分のがんばりや友達との関わりを語る姿に、B児の充実感が伝わってくる。正しく「できた!」「楽しかった!」を実感した姿であった。



<仲間との関わりを語るB児>

(2)地域の「ひと・もの・こと」と関わることで千手への愛着を深めた子どもたち~4年生総合より~

地域から学びたいという強い思いをもつD教諭は、長年、千手小に関わってくださっている保存会の皆さんと共に、学区の緑豊かな二六公園を舞台に、春の全校遠足・植樹活動を入り口として、自然と親しむ・自然を生かす学習を展開した。

子どもたちとD教諭は、改めて保存会の皆さんと共に二六公園を訪れ、自然の中でたっぷりと遊んだり、その思い出を絵に表したりした。その絵は、公園内の間伐材を使って作成したフォトフレームに入れて、千手コミュニティセンターに展示した。また、保存会の皆さんに支援していただきながら、同じく間伐材を使って輪投げをした。子どもたちは自分たちで楽しむだけではなく、児童会行事「わかぶなカーニバル」で全校の子どもたちに楽しんでもらうことで、二六公園の魅力を広く発信し、大きな満足感を得た。

子どもたちもD教諭も、二六公園がますます好きになったそうである。保存会の皆さんや二六公園とつながることで、子どもたちは、自分の住む千手の地域への愛着を深めることができた。



<二六公園は全校のみんなの大好きな場所>

3 成果と課題

仲間や地域の「ひと・もの・こと」との関わりが、「できた」「楽しかった」という実感を生み、自己有用感の高まる姿につなげることができた。

今後も、「ひと・もの・こと」との関わりを大切に、子ども一人一人にとって、安心して居心地のよい学校・学級を造っていききたい。

小中一貫 1 まつのやま学園 松之山小中学校 「生き生きとした子ども」の育成

1 学校課題

本学園は義務教育9年間で発達段階に合わせた「4, 3, 2制」の教育システムを導入している。教育目標「生き生きとした子ども」の実現に向け、「まなび」「からだ」「ゆめ」の取組の充実を図り、生きる力を高めるとともに「まつのやまタイム」を中核とした教育課程の工夫、特色ある教育活動の展開をとおり、地域の伝統・文化のよさを理解し、広い視野をもつ児童生徒の育成を目指す。

2 今年度の取組

(1) 4, 3, 2制による各期の特色ある活動

ホップ期（1年生から4年生）、ステップ期（5年生から7年生）、ジャンプ期（8・9年生）ごとに、期主任を中心に「からだ」「まなび」「ゆめ」での目指す姿や方策を立て指導に当たっている。ホップ期の美人林清掃や、ステップ期の宿泊体験、ジャンプ期の各行事の企画運営等、期での最上級生のリーダーのもと、発達段階に合わせて個々に役割を担い、特色ある活動を実践した。

(2) 特色ある教育活動

① まつのやまタイム：協働推進員との連携

学園では生活科・総合的な学習の時間をまつのやまタイムと呼び、本年度10名の協働推進員（ティーチングサポーター）の協力を得て、地域の自然や文化、人々から学ぶ探究的な学習を行った。

年度初めに学年職員と協働推進委員が目指す児童生徒像を共有し、昨年度の成果と課題をもとに年間計画について検討した。その後、1年生はヤギの飼育、2年生は作物の栽培など計画に沿って体験を重ね、探究学習を深めた。児童生徒は、活動をとおり人とかわる力や探究する心を育てながら視野を広げ、郷土愛や生きる力を付けていった。



② SNOW-SPORTS：スキー協会等との連携

冬季、SNOW-SPORTSを楽しむことなどを目的に1年生から9年生まで期ごとに毎週1回スキー授業を行っている。「松連スキー大会」への参加やオリンピックを招聘してのスキー授業等、スキー学校やスキー協会と連携して実施している。9年間

をとおり、クロスカントリーとアルペンスキーを体験できるカリキュラム編成となっており、児童生徒が雪を楽しみながら技術力向上を図っている。また、全校スキーではスキー後に温泉組合と連携し、「雪煙から湯煙へ」と称して松之山の温泉に入浴する体験を仕組んでいる。これら雪国の冬の魅力を実体験することをとおり、郷土の文化理解につながっている。



(3) 1～9年生の縦割り班活動

全校児童生徒を縦割りのチャレンジ班に分け、つくし会（児童生徒会）を中心に活動している。「1年生を迎える会」でチャレンジ班毎に新1年生を迎え入れ仲間づくり活動をスタートさせた。山菜採りやホップ期の遠足、運動会等、様々な活動がチャレンジ班を中心に組まれた。特に10月に行われる学園フェスタ（学園祭）では、チャレンジ班毎に演劇を発表した。9年生を中心に、シナリオ作り、練習、小道具の制作等が行われ、1年生にも活躍の場が用意された。上級生は下級生に分かりやすく教え、下級生は楽しく役割を果たす姿があった。学園フェスタ当日は児童生徒一人一人が輝く発表となった。



3 成果と課題

学校評価によれば、児童生徒は縦割り班活動などとおし温かな人間関係を築き、役割を果たして生活しているなど高い評価結果であった。保護者も同様で協力的である。今後は、よりきめ細やかな個に応じた指導や支援、家庭との連携に重点を置いていく。また、特色ある教育活動を継続させるための予算や組織、活動内容の見直しを図る。今後も、地域・保護者の信頼を得ながら、一人一人が生き生きと活動する児童生徒の育成を目指す。

中1 十日町中学校

夢や目標をもち、燃え、学び、さわやかに生活する人になろう

1 はじめに

昨年度より「夢や目標をもち、燃え、学び、さわやかに生活する人になろう」という教育目標を策定し、2年目となる。

この教育目標は「人になろう」という点が特徴である。つまり「地域とともに歩む、地域に開かれた学校」を目指し、地域家庭の中でもその学びの姿を生き生きと表現できるようにという願いが込められている。コロナによる行動規制が緩和された今年度は「地域とともに」をキーワードに教育活動を展開した。

2 主な取組の概要と成果

(1) 自己有用感を高める行事活動の工夫

① 体育祭

応援パフォーマンス創作活動を中心とした生徒の主体的な取組では、3年生が中心となりながらも、全校生徒、異学年が積極的に交流し、生徒の主体的な活動により非常にレベルの高いダンスパフォーマンスや工夫を凝らした創作活動を創り上げることができた。より良いパフォーマンスを創り上げようと何度も話し合ったり、練習を繰り返したり、お互いに教え合ったりする姿はまさに「主体的で対話的な深い学び」といえる姿がそこにあった。そして、達成感からお互いの健闘を讃え合う姿に勝敗を超えた子どもたちの成長を感じることができた。

② 合唱コンクール

実行委員会とそれを指導する音楽科教師が連携し、各学年学級の合唱を創り上げた今年度は「段十ろう」での開催となり、生徒にとっても学校関係者、保護者や地域の方々にとっても生徒の澁刺とした感情豊かな表現に浸る瞬間であった。特に変声期を終えた男声パートが迫力のある3年生の歌声は大きな感動を呼んだ。

(2) 地域に学ぶ総合的な学習の時間の取組

① 「十日町の魅力に浸る（1年生）」

1年生はふるさと十日町学習に取り組んだ。今年度は「大地の芸術祭」の開催年であり、大地の芸術祭を題材にふるさと十日町について追求する時間となった。



本校学校支援地域コーディネーターが、大地の芸術祭を支える地域の組織である「こへび隊」のガイドを務めていることもあり、全面的に協力していただいた。

当日はタブレットを持参し、画像を撮影した。その後、夏休みの課題として、自らが興味関心のある作品を自分で選び、自力で訪れてレポートにするという取組をした。さらに2学期にはそれらをまとめて発表するという事後学習を行った。Google CLASS ROOMの共有機能を活用し、スライドを共有して、プレゼンからファイルの提出までを実践することができた。さらにプレゼン発表会には、先述のコーディネーターや、里山協同機構の職員の方に来校していただいた。「夜のライトアップをするともっと良くなると思います」などといった、大地の芸術祭をより良く発展させるための生徒ならではの視点からの提言を高く評価していただき、生徒の学びを締めくくった。

② 「おおまつり 民謡流しへの参加」

2年生は十日町の夏の祭り「おおまつり」での「民謡流し」に参加することが伝統となっている。この2年間は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となったが、今年は開催の方向で練習を開始した。この取組にも学校支援地域コーディネーターから講師を紹介していただいた。3名の地域の方から講師として2、3年生を指導していただき、伝統を継承した。今年度も新型コロナウイルス感染症の影響で、当日は残念ながら中止となったが、事前の練習で途切れることなく伝統を継承できたことは大きな学びであった。



3 おわりに（今後の課題）

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の行動規制が緩和され、中体連大会や学校行事なども感染拡大防止対策を講じながら通常に近い形で開催することができた。子どもたちの学びは、やはり地域や他との関わりの中や豊かな体験の中で育まれるものだ痛感した。今後も感染拡大防止対策を徹底しながら、豊かな体験活動をプロデュースできる学校でありたい。

中4 吉田中学校

将来に向けて身に付けたい力を意識して

1 学校課題と教育目標

当校の教育目標は「ふるさと吉田を愛し、自立して社会で生きる人の育成」である。この目標の実現に向けて、キャリア教育を基盤とし教育活動を展開する。教育活動全体を通じて、将来、子どもたちが社会の一員としての役割や責任を担い、様々な問題に柔軟に、たくましく対応しながら、社会人・職業人として自立していくために必要な能力や態度を継続的に育てていく。

当校の生徒は、分からないことやもっと知りたいことについて、見通しをもって計画的に調べたり、工夫して取り組んだりする力が不足している。キャリア教育について職員全体で共通理解を図り、指導に臨むことで、学力向上（特に学習意欲の向上）についての課題克服を試みる。

2 取組の概要

すべての教育活動において、キャリア教育の視点を盛り込んだ「ねらい」を設定した。また、職員会議を通して教職員全体で共通理解を図った。特に、個々の生徒に身に付け高めさせたい力を意識できるよう、事前事後の学習を充実させた。

<プランニングタイムの取組>

終学活終了後15～30分程度の時間を確保し、学校活動の振り返りを行い、帰宅後の過ごし方についてプランニングする。宿題の確認や家庭学習への取りかかり時間を設定し、主体的な学習を支援する。これにより、計画立案の力を身に付け、家庭学習の習慣化を図る。

<未来デザインタイム（未来D.T）の取組>

職業人・社会人の方から、将来に関わる様々な分野・テーマについての話を聞き、生徒が未来の自分について主体的に考え、キャリア形成を促すことを目指す。今年度は年間4回の講演を実施した。どの講演においても、事前事後の学習に重点を置き、自身が将来に向けて身に付けたい力を意識して講演に臨むことができていく。

<地域連携事業 YOSHIDA 祭の取組>

生徒会が主体となり、地域とのつながりを目的として、フリーマーケットを4回開催した。活動



をする中で、集客数や収益をあげることを目指し、生徒自身が自主的に取り組む姿が見られた。また、フリーマーケットの活動がSDGs達成に貢献できること、寄付活動を通して社会に貢献することの喜びを実感した。

3 成果と課題

<家庭学習を自主的に行う生徒の増加>

学期末に行った生徒アンケートでは家庭学習への取組に対する肯定的回答が80%を超えている。フォーサイト（振り返り力向上手帳）の活用により、家庭学習の定着が見られる一方、十分に活用することができず自身の生活改善につなげられない生徒もいる。個別指導やキャリアカウンセリングにより、自己を見つめ計画や目標を実現させる力を身に付けさせ、より一層、心の醸成と学力の向上につなげたい。

<吉田（十日町）が好きだと答える生徒>

学期末に行った生徒アンケートでは「吉田地域や十日町市が好きだ」と回答する割合が非常に高い（肯定的評価98%）。総合的な学習の時間で吉田地域のこれからについて学んだことや、地域連携事業を通して地域の一員として貢献できたことが、成果につながったと考える。

今後、子どもたちが社会の中で自立し、他者と連携・協働しながら、生涯にわたって生き抜く力や地域の課題解決を主体的に担うことができる力を身に付けられるよう、個々の直面する課題や社会の多様な課題に対応した教育を実施していく。

中6 水沢中学校

地域と歩み地域と共に成長する学校づくり

1 はじめに

当校の教育目標「豊かな心 やりぬく力」の実現に向け、コミュニティースクール（CS）から協力をいただきながら地域の教育資源を有効に活用した。一人一人の生徒が豊かな関りを通して自信をもち、自らを高め、他とよりよい関係を築くために努力することを目指した。

「学ぶ水中 明るい水中 鍛える水中」を合い言葉に、生徒、教職員、家庭・地域が目標を共有し、「知・徳・体」のバランスのとれた力を身に付ける教育活動を進めた。

2 主な取組の概要

(1) 授業改善と学びの基礎づくり

- ・ICTの有効な活用方法を研究しながら積極的に活用を進めた授業改善
- ・少人数指導の実践を通して生徒一人一人のきめ細やかな見取りと個に応じた指導の充実、UDLの視点による授業改善

(2) 望ましい生活習慣の確立

- ・9年間を見通した保健活動推進のための小中及び保護者との協力体制づくり
- ・家庭・地域の力を生かした健康づくりへの意識向上

(3) 認め合い、高め合う人間関係づくり

- ・小中連携を深め「絆づくり」「居場所づくり」に向けた支援
- ・小中連携の「いじめ見逃しゼロスクール集会」の推進と運営
- ・地域や社会とかかわる「心の教育」の推進

(4) 地域と連携した社会性の育成

学校運営協議会（CS）では、「ふるさとを大切にすする心」、「しっかりと社会性、広い視野をもち力強く自立して生きる姿勢」を、育むことを願いとしている。このことを踏まえ、次の取組を学区の小学校及び地域と連携し、キャリア教育も見据えて実施した。

- ・あいさつ交流（小中P）
- ・あいさつ総会（〃）
- ・いじめ見逃しゼロスクール「絆集会」
- ・水沢ハローワーク（1年）
- ・学校林整備作業（官民地域連携）
- ・福祉施設体験活動（3年）
- ・学校保健委員会→学区各校で実施
- ・農業体験（1～3年生：ドクダミ、人参、ジャガイモの収穫体験の実施）
- ・絆学習交流（算数授業：水沢小、馬場小へ3年生訪問）



水沢中学校伝統の学校林作業の様子



農業体験で大根抜きを行っている様子

地域の方々と連携して学年ごとに農業体験を行うことができた。今年は、初めて「ドクダミの収穫」を体験することができた。また、地域の方から仕事手順だけでなく仕事への情熱ややりがいなどを学ぶ貴重な機会となった。

(5) その他

- ・PTAとの連携、協力
- ・学校の情報発信（学校だより、ホームページ、C4TH, H&S）

3 成果と課題

全職員体制で生徒一人一人と寄り添い、向き合いながら、生徒が目標をもち学習できるように支援し確かな学力の定着に努めた。学力検査等の結果では依然課題は見られるものの、授業における生徒一人一人の理解の状況は良好であり、少人数指導をはじめとした支援が成果となって表れたと捉えている。更に小学校と連携を深め、生徒の学習習慣の向上を図るなど、家庭や地域と協力した支援体制を整えたい。

今年度は、不登校生徒の変容が見られ、登校できる生徒が増えるなど状況が好転し、自己有用感の高まりを感じることができた。

今後も地域人材を有効に活用し、積極的に関わられる教育課程を編制し、地域との絆をさらに強めていく。地域と共に成長できる学校づくりを進めたい。